

特集 南スーダンでのミッションを終えて

眞壁仁美

赤十字国際委員会 駐日事務所
広報担当官

今年の2月1日より約3ヶ月間、フィールド国際要員として南スーダンに短期赴任しました。隣国スー丹との関係が日々緊迫していく中での人道支援。ICRCの現場では専門分野を持つ職員が多い中、私の場合は短期間ということもあり、人手の足りないプロジェクトや人道ニーズが高まる地域に派遣され、国中を移動しながらの活動となりました。

生活の自立支援

武力衝突による治安悪化により国内避難民となった人々や、かつて国内避難民だった人々に対して、ICRCは農具や種を無料で提供しています。2月上旬から二週間は南西部で約3,500世帯に、また帰属を巡ってスー丹と係争中のアピエイ地区周辺では3月末～4月上旬にかけて約2,500世帯に対して配付活動を行いました。農具はクワやシャベル、オノ、種はナス、トマト、玉ねぎ、落花生、トウモロコシ、そして農作業をするための食料（トウモロコシ、豆、塩、砂糖、食用油）を、事前に登録を済ませた人々にチケットと引き換えに渡します。

登録から配付まで、常に南スーダン赤十字社のボランティアと一緒に。寝起きも共にし、公私の時間を共有するため、団結は日毎に深まります。夕食は、品薄な市場で材料を買い込み、女性陣が自慢の腕を振るってくれます。大抵、肉（牛や鶏、何かの野生動物？）を煮込んだものに、キャッサバ（酸味の利いたマッシュポテトのような主食）。話題はもっぱら、大家族で困窮する台所事情や将来の夢でした。

家畜へのワクチン接種

南スーダンの人々にとって、家畜、特に牛はかけがえのない財産です。私たちは自立支援の一環として、農務省や国境なき獣医師団と共に、北部で1ヶ月半、ワクチン接種キャンペーンを行いました。対象となるのは、10万頭近くの牛と、約1万頭の羊・ヤギ。放牧の時期だったため、早朝大量の牛がひしめき合うキャンプに出掛け、牧草地に向かう昼前に、逃げる牛を捕まえて一頭一頭に注射を打ちます。一連の作業をするのは、事前に訓練を受けた地元住民20人。ワク



タイヤの跡を外れないよう地雷原のドライブは命がけ（ジョンゲレイ州北部）



ICRC

同僚と一緒に国内避難民のニーズ調査をした時の一枚。後ろに見える藁の建物が避難民の仮の住まい（上ナイル州マベック）

チンの恩恵を受けるコミュニティーが主体的に参加することで、支援を「受け身」の立場としてではなく、自立を目指した第一歩と捉えてもらうことが狙いです。

離散家族の再会・連絡回復

紛争や部族間の暴力の応酬などで離れ離れになった家族に、赤十字通信を41通届けました。国内外に散らばる家族から寄せられたメッセージを、宛名の人物の行方を突き止めて、本人に手渡します。私たちは配達と同時に、行方不明になった人の追跡調査依頼も受け付けました。最後に見かけたのはいつ、どこだったのか、その後消息に関する噂などを耳にしたことがないかなど、家族や友人、隣人から知りうる限りの情報を聞き取ります。

ICRCの追跡調査により、2005年、一人の男性が23年ぶりに母親と感動の再会を果たしました。離れ離れになった当時まだ少年だった彼は立派な男性に成長し、以前の面影はほとんど残っていません。再会当日、母親は遠くから歩いてくる彼の姿が目に入るや号泣。笑顔で近づいてくる我が子の歯並びを見て、即座に息子だと確信したといいます。「ICRCに恩返しがしたい」と私に語ってくれたその男性は、今、北西部ワウにあるICRC副代表部の人事担当として現場の活動を支えてくれています。

危険と隣り合い、命と向き合った日々

一番苦労したのは移動でした。全ての活動は、点在する村を移動して行われます。道なき道を大量の物資を積んだ大型トラックと共に移動するため、道すがら周辺の住民の助けを借りて、オノで木を切り倒し、枝を刈りつつ進んだこともあります。また、地雷原を轍に沿って片道四時間半かけて進み、赤十字通信を届けたことも強烈な思い出として残っています。大破して路肩に放置された車に、道中の恐怖がさらに

煽られました。任務の後半はスー丹との国境沿いで活動するが多く、両国の軍事的緊張が高まるにつれて移動制限もかかりました。実際、空爆された地域とそう離れていない所に活動拠点が置かれていました。それ以外にも、蜂の大群に急襲されたり、毒蛇やサソリ、マラリアなどの危険と隣り合わせの生活は、刺激的以上の経験でした。私はこれまで駐日事務所の広報として、「紛争の最前線で人々に寄り添い、命と尊厳を守るのがICRC」と伝えてきましたが、暴力の犠牲となった人たちを支援・保護する前に、まず自分たちの命と向き合わなければならない現実を思い知らされました。30年以上続いた紛争は、負の遺産として南スーダンの人々に暗い影を落としています。電気も水も、日々の食料すら欠いている現状に加え、教育の機会や医療の水準もはるかに乏しい現実。支援する側も、支援を必要とする側も、過酷な生活環境に身を置きながら日々闘っています。

日本に帰国する直前、南スーダン当局に拘束されていたスー丹人13人が釈放されました。スー丹と一触即発状態に陥った4月上旬、当局から初めて収容所訪問の許可が下り、ICRCは全員を訪ねて処遇を確認、家族へのメッセージも預かりました。その後エジプト経由で母国への帰還をサポート。帰りの飛行機を待つ彼らの笑顔は今でも忘れられません。決して平坦ではなかった南スーダンでの3ヶ月の道のりでしたが、ICRCで働く醍醐味を実感した瞬間でした。



T. Stoddart / Getty Images / ICRC

2012年7月9日に独立から一周年を迎えた南スーダンの現状をウェブ上で特集しています。

記事は駐日事務所ウェブサイトを、映像は本部のICRC Video Newsroom (www.icrcvideonewsroom.org) をご覧ください。